

ジャン・カルロ・メノッティ原作 石井忠雄脚色

「もう一つのクリスマス物語 アマールと三人の博士」

< 前編 >

(音楽) (「ああベツレヘムよ」)

ナレーション 今から約2000年も前のことです。ここは、ユダヤの国ベツレヘムという村からさほど遠くない、ある小さな村外れの家です。

母 アマール、いつまで外にいるの？ もう家に入って寝なさい。

アマール うん、もう少し。もう少ししたら入るよ。

母 そんなこと言って、いつもグズグズして。結局わたしの言うことを聞かないんだから。

アマール 分かったよ。ねえ、お母さん。今、僕、すごいものを見ていたんだ。何だか分かる？

母 さあね。夜だから、何にも見えやしないだろうに。

アマール それが、ちゃんと見えるんだ。母さん、驚かないでよ。うちの屋根の上に、うちの窓ぐらいいもある大きな星が輝いているんだよ。

母 何をデタラメ言ってるんだい。そんなおとぎ話を聞いたって、おなかの足しにはなりやしないよ。早くお休み。

アマール ウソじゃないよ。本当に大きな星が見えるんだ。お母さんも外に出てごらんよ。

母 かわいそうに、アマール。お前は、おなかですきすぎて、頭が変になったんだね。今日も、夕食にパン一切れと、ソーセージ一本しか食べていないものね。でもうちは、父さんが死んでしまってから貧乏になってしまい、お前の足が病気で動けなくなってしまうても、何もしてあげられない。お金持ちは、有り余る食べ物を捨てているというのに。神様は、なぜわたしたちにこんなつらい仕打ちをなさるのだろうねえ。

アマール 母さん、やめておくれよ。僕は母さんと一緒なら幸せだよ。ねえ母さん。僕たち、ここで生活できなくなったら、こじきになろうよ。僕はピエロになって母さんが歌を歌うんだ。村から村へ旅をして。きっと人気が出るよ。

母 そうだね。かわいそうなアマール。さあ、早くお休み。

ナレーション アマールと母親が寝てから、どのくらいたったでしょうか。家の外で話し声が聞こえます。

カスパール 今夜はずいぶん冷えるなあ。

メルヒオール 星を目当てに旅をしてきたが、いつ目指すところに着けるのかなあ。ラクダも疲れただろう。

バルタザール 手がこんなにかじかんでしまって、物を持つこともできない。どうだろう、この家で少し休ませてもらおうか。

カスパール みんな寝ているだろう。

バルタザール そこを丁重にお願いするのさ。ドアをたたくよ、いいかい？

(効果音) (ノックの音、数回)

アマール だれだろう、こんな夜中に。泥棒だったら、何も取る物ないのに。そうだ、窓からのぞいてみよう。

(間)

アマール あ、大変だ！ 大変だ、お母さん。外に、冠をかぶった博士たちがいるよ。ちょっと来てみてよ。

母 (眠そうに) 何だねえ、この子は。そんなデタラメ言うと、承知しないよ。

アマール 本当だよ。ちょっと来てよ。

母 ウソだったら、ぶつからね。

(間)

母 あ!!

アマール ね、本当でしょう？

カスパール こんばんは。

メルヒオール お邪魔します。

バルタザール こんな夜中にすみませんが、わたしたち3人と、この召し使いを少し休ませていただけませんか？

母 あ、はい。でもわたしの家は、狭く、何もありません。炉にくべるマキもありませんし。差し上げるスープもパンもありません。

カスパール 結構ですとも。わたしたちは、少し体を横にできる場所があればいいのですから。

母 それでよろしければ、どうぞ。

三人の博士 ありがとう。

母 あ、そうだ。裏にマキになる木があります。取ってきましょう。

メルヒオール いや、構わんでください。

母 でも、ちょっと。アマール、お客様に物をねだったり 迷惑をかけるんじゃないよ。

ナレーション 母親がマキを探しに出ていくと、アマールは三人の博士の前に出ました。

アマール ねえ、あなたたちは、本当の博士なの？

バルタザール そうだよ。

アマール じゃ、大きな御殿に住んでいるんだね。

バルタザール そうだよ。ところで、坊やは何をして暮らしているのかね？

アマール うん... 僕、羊飼いだっただ。でも病気で片方の足が動かなくなってね。や

めてしまったの。父さんも死んでしまったし。たくさんいた羊も売ってしまい、もう一匹もないのさ。母さんは、もうじきにでもなるしか方法はないって言うてるけど。

- カスパール　　かわいそうに。わたしたちも何かしてあげたいが、先を急ぐのでな。
- アマール　　あのう、博士様の持っている箱の中には、何が入っているのですか？
- カスパール　　これかい？ 黄金と乳香、それにもつ薬だよ。
- アマール　　それをどうするんですか？
- メルヒオール　　これはな、1年ほど前にお生まれになった、高貴な方に差し上げるのだ。
- アマール　　ふーん。もう一つの箱には？
- バルタザール　　これはわたしの宝箱だ。これには魔法の宝石が入っているんだよ。ああそうそう、わしはおいしいお菓子を持っていた。最後に残った一つだが、君にあげよう。
- ナレーション　　アマールがそのおいしそうなお菓子を受け取ろうとした時
- 母　　アマール、何してるの！ お客さんに迷惑かけちゃいけないって、あれほど言っておいたのに。
- カスパール　　しからないでください。今、坊やと、宝の箱のことで話しをしていたんですよ。
- 母　　まあ、本当、ステキな箱なこと。それに、たくさんの黄金。
- メルヒオール　　これは、みんな、これからわしらが訪ねていく、高貴なお方へのプレゼントなんですよ。
- 母　　その方は、どこに？
- メルヒオール　　わしらは、その方を、星を頼りに探して旅をしているのです。もうじきお会いできるでしょう。
- 母　　もっとその方のことを話してくださいな。今、炉に火を入れますから。
- メルヒオール　　あなたは、小麦色の肌をした、夜明けの空の色のような子を知っているかね？ その目は優しく、その手は王者の手だ。
- 母　　その子なら知っています。その目は優しく、手は王者のようです。でもその子は、貧しく、不幸せで、おなかをすかせているのです。
- バルタザール　　では、青ざめた肌、イバラのトゲの色をした子を知っているかね？
- 母　　知っていますとも。その目は悲しみにあふれ、名もなくひっそりと暮らしています。
- カスパール　　わたしたちの探しているお子は、世界をその手のひらにつかんでおられる。そのみ前には大空を飛ぶワシさえ翼を休め、獅子もうなり声を潜める。
- 母　　わたしの知っている子は、その手で、わたしの心をつかんでいます。貧しく、乏しく、片足はなえています、わたしは愛しています。その子こそ、わたしの愛するアマールです。
- メルヒオール　　おかみさん、おっしゃることはよく分かります。アマールは利口なよい子だ。き

っと幸せになりますよ。さあ、もう夜も更けた。わしらは、少し横にならねばならない。お休みなさい。

ナレーション 三人の博士とアマールは、それぞれ、ワラの床に入って眠りに就きました。アマールの母だけが、独り起きていました。暖炉の火に照らされて、博士たちの持ってきた黄金が、まばゆいばかりに光り輝いています。

母 何て美しい黄金だろう。高貴なお子という方は、何と幸せなんだろう。金持ちには、暖かいベッドの中で明日の心配もすることなく眠ることができる。彼らにどんなにお金をあげたって喜びやしない。それなのに、その有り余る黄金の上に、じきにまたこの黄金が積まれるんだ。それなのにわたしたちは、ひとかけらのパンにも事欠いて、飢えて死のうとしている。何てことだろう。神様はこの不公平を何とも思いにならないのだろうか。そうだ、少しぐらい、少しぐらいなら、神様もお許しになるだろう。わたしの愛するアマールの足を治すためだ。少し、ほんの少しだけ。

ナレーション そうつぶやくと、母親はそっと立ち上がり、博士たちの黄金に手を触れました。その時です。博士たちに付き添っていた召し使いが目を覚まして起き上がり、大声で叫んだのです。

テマール 泥棒！ 泥棒だあ！

ナレーション 母親は、ギクッとしたまま、そこにクギ付けになりました。彼女の顔からは、見る見る血の気がうせていきました。

< 後編 >

テマール 泥棒！ 泥棒だあ！ ご主人様、起きてください！

カスパール 一体何事だ、テマール？

テマール この女が、この女が、高貴な方に差し上げる黄金を盗もうとしたのです。

母 お赦ゆるしてください。どうか赦してください。わたしが悪うございました。

テマール 何を言うか。この泥棒女め。ほかにも何か取ったろう。さあ出せ。

ナレーション と、その時、目を覚ましたアマールは、不自由な体で召し使いに飛びかかりました。

アマール 放せ、こら、放せ。母さんに何をやるんだ。博士様、お願いです。母さんを放すように言ってください。母さんは良い人です。僕のために一生懸命に働いてくれています。僕の足が治るようと、毎日お祈りをささげてくれているのです。悪いのは僕のほうです。ウソつきで泥棒です。この間も、町の肉屋で、ソーセージを盗んで食べました。どうぞ、僕をぶって、母さんを赦してやってください。

メルヒオール テマール、放してやりなさい。(少し間)おかみさん、この黄金はお前さんに上げよう。取っておきなさい。

母 え？ 黄金をわたしたちに？ とんでもありません。わたしは、高貴な方に差し上げる黄金を盗もうとした、罪深い女です。

メルヒオール (間) いや、その高貴なお方は、本当は黄金などというものには用のない方なのだ。

カスパール そうかもしれんなあ。その高貴な方は、神のお子であられ、世界をつくり、これを支配しておられる。全世界は、その方のものなのだ。

母 そんなにすばらしい方が、お生まれになられたのですか？

バルタザール その方は、すべての人間からあがめられ、礼拝を受けるのにふさわしい方だ。

アマール その方は、どこの御殿に？

メルヒオール 金持ちの住む御殿ではない。王の住む宮殿でもない。だれも知らない、貧しい家にひっそりと。

アマール どうして、そんなに貧しい家に？

カスパール わたしたち人間を滅びから救うためじゃよ。

アマール 救うって？

カスパール わたしたち人間は、まことの神を捨て、自分勝手な道に歩んでいる。そして高ぶり、隣人^{となりびと}を愛することより自分の利益を求め、富む者は自分の幸せばかりを考え、貧しい者がいても顧みない。互いに争い、傷つけ、力のある者が弱い者を押さえつけている。このようなところから、わたしたちははい上がる力を持っていない。わたしたちの行く末は、滅びだ。そんなわたしたちのために、このお方は、ご自分の輝かしい栄光をお捨てになったのだ。

メルヒオール そのお方は、やがてクギで刺し貫かれる。人に捨てられ、あざけられ、顔につばきをかけられ、殺される。多くの人間は、その方が人々を悲惨な罪の状態から解放するために来られたことを認めようとしません。

カスパール それなのに、その方は、わたしたち人間を愛し、人間の罪の罰を身代わりとなって受けてくださるのだ。こんなことは、いまだかつてなかったことだ。

バルタザール そして、ご自分の死により、わたしたち人間に新しい命、永遠の命をお与えになるのだ。

メルヒオール その方は、わたしたちの苦しみや悩みを共に体験され、わたしたちを愛し慈しんでくださるために、自ら貧しくなられた。だから、その高貴な方には、黄金はふさわしくない。さあ、取っておきなさい。

母 待ってください。この黄金をその方に持って行ってください。わたしたちのために、いや、こんな罪深いわたしのために、わたし以上に貧しくなられたその方に。わたしは知らなかった。苦しくても、わたしら 2 人は何とか生きていける。でも、わたしたちを救うためにこられた方が、苦しみ、貧しくなられるなんて。わたしたちも、こんなに貧乏でなかったら、何かささげ物をしたいのですが。

アマール 母さん、僕のこのつえ、このつえをあげよう。これは自分で作った僕の宝物なんだ。

母 アマール、そうしたら、お前は一体どうやって歩くんだい？

アマール でも、その方だって、足を痛め、つえを必要とすることもあるんじゃないかなあ。ねえ博士様、僕のつえを持って行ってください。なあに、僕なんか、その方に比べれば、幸せ者さ。さあ、受け取ってください。

ナレーション その時です。

カスパール 坊や。

メルヒオール 坊や。

バルタザール 坊や、もうつえは要らないのではないかね？ 君は自分の足で歩いている。

母 (驚いて)あ、本当だ！ アマール、お前、自分の足で歩いているんだよ。

アマール 本当だ。僕の足は、僕の足は治ったんだ。もうつえなんか要らないんだ。本当だ、わあ、うれしい！

母 アマール、本当によかったね。

メルヒオール これは神様のみ業だ。神は、自分を低くし、罪を悔い改めた者に、み業を現してくださったのだ。さあ、行こう。わしらも、そのみ子を礼拝しに。

アマール ねえ、母さん。僕、このつえを自分で持って行って、その方にあげたいんだ。博士たちと一緒に行ってもいいでしょう？

母 でも、足は治ったばかりだし、博士たちの足手まといになってはいけなから…。

アマール 大丈夫だよ。足なんて、こんなにピンピンしてる。それに、僕うれしくて、足だけでなく、この体も、何かのお役に立てば差し上げたいくらいなんだ。

母 まあ、アマールったら。

カスパール お母さん、心配要りませんよ。わしらが責任を持ちましょう。必ず無事に坊やを連れて帰りますから。

母 アマール、本当に行きたいのかい？

アマール うん、行きたいよ。そして母さんのことも話したいんだ。

母 そうかい。母さんは、祈りながら待っているから。博士たちに迷惑をかけるんじゃないよ。そのお方に会ったら、ちゃんと礼拝をしてくるんだよ。母さんの分までね。

アマール うん、分かった。

メルヒオール 用意はいいかね。では出かけるよ。

ナレーション こうして三人の博士、召し使い、そしてアマールの一行は出発しました。夜の間に、アマールの家の真上にとどまっていたあの大きな星は、またゆっくりと一行の前を動き出しました。

アマール 皆さんは、そのお方のお生まれになった場所が、どうして分かるんですか？

バルタザール あの手だよ。わたしたちは、あの星を故郷の東の国で見たのだ。これまで見たことのない、不思議な輝きを持った星だった。わたしたちは一生懸命に調べて、ついに、これこそあの高貴な方キリスト様の誕生を告げる星だと分かったのだ。

アマール
カスパール それで、あの星を頼りに、はるばる東の国から来られたの？
そうじゃ。わしらは、砂漠を越え、川を渡り、谷を抜け、1年近くの長旅をして、やっとこのユダヤの国にたどり着いた。そして、高貴なお方なら、あるいは王様をご存じかと思い、まず都のエルサレムに行って、ヘロデ王様にお会いしたのじゃ。

メルヒオール ワシらが「ユダヤ人の王様としてお生まれになった方をご存じですか？」と尋ねると、ヘロデ王はひどくおじ惑って、早速、民の祭司長や学者たちを皆集めて、「キリストはどこで生まれるのか？」と聞いたのだ。

バルタザール すると、律法学者たちが聖なる巻き物を調べ、「それは、ユダの地ベツレヘムです」と申したのだ。

アマール ベツレヘム？ それなら隣村だよ。お父さんが生きてたころは、僕も一緒に、あそこまで羊に草を食べさせに連れていったんだ。あそこには、いい草の生えた広い野原があるんだ。

カスパール
ナレーション そうか！ それでは、もうすぐだ。夜も明ける。急ごう！
一行は、もうすぐ救い主に会えるという喜びで、道を急ぎました。大きな星は、ベツレヘムの村外れの宿屋の上にとどまりました。

テマール
ナレーション ご主人様、あそこです！ だけど、あれはどうも家畜小屋みたいだけど...。
そうです。そこはむさくらしい家畜小屋でした。けれどもそこには、なんとも言えない清らかな空気が満ちていました。幼子は、母マリヤの腕の中に、あどけない笑顔で抱かれていました。

メルヒオール おお、このお方じゃ！ 神のみ子じゃ。さあ、キリスト様にふさわしいささげ物をして、礼拝しよう。しもべは、王なるお方に黄金をささげます。

バルタザール 聖なるみ子に、香よき乳香をおささげします。

カスパール やがて我らのために命をお捨てくださる救い主に、もつ薬をささげます。

アマール 僕は、僕は、このつえをささげます。ほんとに不思議なことが起こったんです。何とか一目お会いしたいと思ってたら、悪い足が治ったんだ！ 貧しくて何もあげるものがないけど、お母さんが、このつえをおささげして、心から礼拝しておいでって。

マリヤ まあ、うれしいこと。大切にに使わせるわね。

アマール お名前は...何て言うんですか？

マリヤ イエス。イエスと言います。ほら、ご覧なさい。この子もこんなに喜んでいません。

ナレーション アマールは、その時見た幼子の、何とも言えない優しいひとみを、生涯忘れることはありませんでした。

(音楽) (BGM 讃美歌 107 まぶねのかたえに)」

ナレーション けれどもその時の彼は、この幼子イエスがやがて青年となり、神の国を説いてユダヤの国々を巡られた時、その手にこのつえがいつもしっかり握られていたことを、知る由もありませんでした。そしてこの、すべてを赦し、受け入れるような愛のまなざしを、再び十字架の下で仰ぐようになることも…。

(音楽) (諸人こぞりて)」

バルタザール おお、夜が明ける。

カスパール もうじき、東の空から太陽が昇るだろう。

ナレーション それは、「義の太陽」の訪れを告げるかのような、すがすがしいクリスマスの朝でした。

< 完 >